

〈貧困〉を生きることの社会学：フリーター／ホームレス・貧困の文化・再生産

益田, 仁

<https://hdl.handle.net/2324/1654619>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（人間環境学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏名	益田 仁			
論文名	＜貧困＞を生きることの社会学 ——フリーター／ホームレス・貧困の文化・再生産——			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	高野和良
	副査	九州大学	教授	安立清史
	副査	九州大学	准教授	山下亜紀子
	副査	九州大学	教授	三隅一人

論文審査の結果の要旨

本論文では、現代日本社会における不平等・貧困（以下、＜貧困＞と表記）の再生産メカニズムが検討されている。現代の日本社会において不平等・貧困状態に置かれた人々は、どのように自らの人生を受け止め、意味づけ、日々の暮らしを送り、将来への展望を抱いているのか、そして、この主体的な営みは、再生産過程でどのような役割を果たしているのかを明らかにするために、低賃金で不安定な雇用で働く若者たち（フリーター）の生活世界から不平等を生きるという経験を、野宿生活を送る高齢者（ホームレス）の生活世界から貧困を生きるという経験をとらえることにより、不平等・貧困の再生産の動的過程が主体の側から把握されている。第1章では貧困（概念）が定義され、格差社会論の検討を経てフリーター／ホームレスが新しい貧困問題であることが先行研究のレビューをふまえて確認されている。第2章では、社会学的な不平等・貧困研究の学説史と再生産概念の検討をふまえ、再生産論の代表的な理論が検証されている。第3章では、再生産論における「主体的なもの」（アスピレーションやハビトゥス）の理論的位置づけが検討され、「貧困の文化」論を手がかりとして、現在志向性が「貧困の文化」の核であり、希望がそれを消失させることを確認し、「希望－現在志向」という観点から＜貧困＞状態に置かれた人々の生き方をとらえることの意義と可能性が論じられている。第4章では、3名のフリーターへの継続的な聞き取り調査の結果が、第5章では、2名の高齢野宿者への同行調査の結果が検討される。そして終章では、フリーター／ホームレスともにその生活を支えるために何らかの「希望」が必要とされているが、その「希望」が当事者の意図とは逆の機能を結果的に果たしており、再生産の過程で「希望」が重要な役割を果たしていることが明らかにされる。

本論文は＜貧困＞が拡大しつつある現代日本社会を事例として、再生産の動的プロセスの一端を示し、構造に規定された「希望」をもって生きる主体による再生産という新たな主体像と再生産過程を示したことによって貧困の社会学的研究において新たな知見を得ている。

本論文について口頭による試験を行い、論文の内容について質疑を行ったが、いずれも著者から満足な回答を得られたため、最終試験に合格したものと認める。

よって、本論文は博士（人間環境学）の学位に値するものと認める。